

## 本来の“虚実”、“陰陽”を考える

鶴田　ここで最も大事な虚実の問題になってくるのですが、これもわかりやすいように私の失敗した経験をお話しますと、私の親友で腎臓ガンになったのがおりまして、同級生ですから、まだ37歳の時に腎臓ガンになって、それで、早期発見で右の腎臓を1個取ったんです。肝臓すれすれのところで危ないところだったんですが、それはうまく取れたところが、その手術をした後に、もう、何しろ立ちくらみしたり、体がだるいとかね、何かどす黒いような変な顔色でね、ちっとも元気が出ないという。そこで私は当然、元気をつけなくてはと思って、補中益気湯じゅうぜんだいほとうと十全大補湯を服ませましたが、ちっとも効かないんですよ。

—それである時、山本先生に「実は、腎臓ガンの手術の後、ものすごく体が弱っているけど、どうしたらいいですか？」って伺いましたら、先生が、「それはね、通導散つうどうさんを服ませなさい」と。通導散に桃仁とうにんと牡丹皮

を入れて、煎じ薬で飲ませる。そして、「芒硝ぼうせうは体が冷えているから去れ」と。「大黄は、ほんの少しでもいいから入れる」と言われたんです。私は、通導散というそれまでの固定観念で、虚実という大きな問題があつて、虚というのは体が弱つたような人で、実というのは、もう体力が充実して元気のいいやつだという頭がありますでしょう。まさに、その私たちの友だちというのは、そういう意味から見ると、虚の最たるものですね。

その手術をした後、元気がなくて、気力がないというのは、もう、虚の最たるもので、顔色も真っ青で、下痢をしちゃつて、ちよつと歩いただけでフーフー言うわけです。それで、通導散というのは実を瀉す薬の最たるものだと思つていましたから、これで本当に良くなるのかなと思つたけれど、私はそれまで先生の言われた通りにやつて全部成功してきましたから、その時も通導散を煎じ薬で、桃仁、牡丹皮を加えて、下痢しているけど大黄を1gだけ入れて、それで、芒硝を抜いて服ませました。そうしたら、2週間ぐらいで元気になった。顔色が良くなつて、よく効いた。よっぽどあれは元気が出る薬だなと思つたんです。

そして、先生にそのことをご報告申し上げて、「先生、あれ、どういうことですか？」って伺ったら、「そりゃあ、ガンというものは、おけつ瘵血の病邪の実した最たるものだから、それを瀉するには通導散がいい」とまだ30代で若いですから、まず、その瘵血の病邪を瀉しておいて、その後、補益するというふうでないといかんということを言われたんです。その通りやって、いま彼は元気にしております。

だから、そうなりますと先生、どうしてもやはり、今の漢方家の多くは、正気の虚実しか言わないという問題がありますね。いわゆる正気というのは、気と体力だとか、抵抗力だとか免疫力だとか、そういうものの虚実しか言わずに、それに対する方剤しか言わないということ。これでは全然、効果がないと思います。正気にも虚実があるし、それから病邪にも虚実があると。

特にガンなんかの場合は、やっぱり邪の実した瘵血というものがあるれば、その最たるものだから、それを瀉さなければ良くならないという事。これは全く大きな、そして今までの漢方で先生以外の方は言われていないことじゃないかと思うんですが、それはどうでしょう？

**顔色は……**〔症例〕『続建珠録』の大柴胡湯治験／吉益南涯（島之内の人（周藏）の治験）腹痛を患っていたが、とさどき憂うつになったり、怒ったり感情の起伏が著しい。この状態が数年続いたところで診療した。疾は胸脇に在り、心下に抵抗があつて腫瘍状であり、圧痛がある。身体は痩せて顔色は菜っ葉のようで便秘し、食欲が半減したとのことで、大柴胡湯を与えたら1年余りでやや軽快した。そこで休薬していたら半年ほどで再発し、心下の塊は大きくなり、瓜状で硬く充実してある。患者は苦悶状で感情の起伏が激しく、狂状を呈した。そこで前方に芍薬散を兼用したところ、3ヵ月ほどで悪臭のものを大量に下して快癒した。（『日本医師会雑誌』より）

**山本** そうですね。だけど、そんなことを言い出したのは、それは昭和あたりの漢方家だけです。

**鶴田** あの正気の虚実だけ言い出したということですか？

**山本** 昔はそんなこと言ってなかった。それを昭和の漢方家が、あいう「簡便漢方医学」をつくった。その大綱に陰陽、虚実を取り上げた。昔はそうでもなかった。

**鶴田** そうですか。今の虚実の考え方は、まだそんなに新しいのですね。

**山本** ええ。大柴胡湯だいさいことうでも「顔色は菜っ葉の如く……」と書いてあるでしょう。正気は虚しているが、それでも、腹の中に瀉さなきやならない毒（病邪）があるから瀉しているんです。違いますか？

**鶴田** そうですね。

**山本** だから、それは昔の人は皆そう、それが普通だったんです。それがいつの間にか正気の虚実で虚証とか実証などと病人を分類して、わけのわからない方剤を与えるのです。方剤の味もわからずに。

それで、顔色は菜っ葉の如き、元気のない人を大柴胡湯で治したのは、